

注文の多い料理店 (宮沢賢治)

日下部 真依、口石 梨絵、児玉 萌、清水 愛美



一 作者と作品について

宮沢賢治は一八九六年八月二十七日(戸籍上は八月一日)に岩手県に生まれた。父政次郎と母イチとの間に長男として生まれ、四人の弟妹と育った。一九〇三年尋常高等小学校に進学し、一九〇九年には、旧制盛岡中学校に進学した。家庭の方針としてこれ以上の進学は難しかったが、親の許しをもらい盛岡高等農林学校に進学した。二十歳の時に妙法蓮華経と出会った賢治は、強く感銘を受け、篤く信仰するようになり、後の彼の思想や行動に大きな影響を与えた。卒業後、上京したが、妹トシの発病のため、岩手に帰り、看病をしながら花巻農学校で教師として働いた。一九二二年にトシが病氣のため亡くなる。「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」と呼びかけており、賢治にとつて一番の理解者であったトシの死は、賢治に大きな悲しみを与えた。一九二四年四月、詩集『春と修羅』を自費出版し、一月に『注文の多い料理店』を出版した。しかし当時は、一部の人々が、世紀を抜いた詩人と称賛した他は、死後に至るまでほとんど世間から顧みられなかった。一九二六年に農学校を退職後、農業指導に奔走するが過労から病気になる、療養生活を送る。その後一旦は回復に向かったが、再び病に倒れる。手帳に「雨ニモマケズ」を書きとめたのはこの年の一月であった。一九三三年急性肺炎で死去。享年三七歳だった。

宮沢賢治の童話としては、「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」、「どんぐりと山猫」、「よだかの星」などがある。「注文の多い料理店」は童話集『注文の多い料理店』におさめられている短編の一つである。

『注文の多い料理店』

発行者 近森善一

刊行者 及川四郎(光原社主)

発行日 大正一三年一月一日

目次

どんぐりと山猫	一九二一・九・一九
狼森と笹森、盗森	一九二一・一一・〇
注文の多い料理店	一九二一・一一・一〇
鳥の北斗七星	一九二一・一二・二一
水仙月の四日	一九二二・一・一九
山男の四月	一九二二・四・七
かしはばやしの子	一九二一・八・二五
月夜のでんしんばしら	一九二一・九・一四
鹿踊りにはじまり	一九二一・九・一五

定価 一円六十銭

この童話集には「序」がつけられており、これらの童話は宮沢が日

常の中で「どうしてもこんなことがあるやうでしかたない」ように感じたことをありのままに書いたものであるとしている。

宮沢は『注文の多い料理店』の解説においても同じようなことを述べており、彼の故郷である岩手県を舞台に描いているということ、「卑怯な成人たち」ではなく、「純真な心意の所有者たち」に向けた物語であるということを加えている。

さらに童話「注文の多い料理店」の解説においては、

二人の青年紳士が猟に出て道を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却って注文されてゐたはなし。糧に乏しい村の子どもが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感で

と書いている。命を代用品のように扱う紳士が、却って山の化け物に食われようとしてしまうという物語から考えても、宮沢の都会、または階級に対する幼いころからの思いを読み取ることができるのではないだろうか。

参考文献

宮沢賢治、『宮沢賢治全集』、第八巻、筑摩書房、昭和四三年

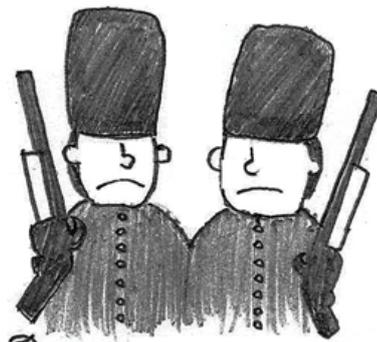
東光敬、『宮沢賢治の生涯と作品』、百華苑、昭和二四年

二 叙述について

二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうを担いで、白くまのような犬を二ひき連れて、だいぶ山お

の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを言いながら、歩いておりました。

「しんし」や「イギリスの兵隊」という言葉から、西洋の雰囲気を感じられ、世界観を複雑にしている。しかし、「すっかり」や「形をして」とあるので、見た目だけ整えたということが分かる。さらに「ぴかぴかする鉄ぼう」とあるので、新しい鉄砲であり、この二人は狩りに関して素人で、遊びに来たと考えられる。季節は「木の葉のかさかさ」とあるので、葉っぱが落ちている秋〜冬の初めである。



鳥もけものも一ぴきもいやがらん。

一ぴきもないくらいだから、凶暴な山猫の縄張りである。後から起こることの伏線でもある。

「いやがらん」という言葉にはじまりこれ以降にも動物を見下した言動が多く、後に食べられそうになることで、自然軽視を風刺している。

何でも構わないから、早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。

「やってみたい」という記述から、二人は猟師ではなく、娯楽として狩りを楽しむに来た。

しかの黄色な横つばらなんぞに、二、三発おみまいもうしたら、ずいぶ

ん痛快だろうねえ。

狩られる動物たちのことを少しも考えない残酷さが感じられる。「おみまいもうしたら」とあるのは、皮肉が込められた敬語である。また「黄色な」というのは、文法的にあまり用いない表現だと思われるが、くだけた表現になっている。

案内してきた専門の鉄ぼううちも、ちよつとまごついて、どこかへ行つてしまったくらいの山おくでした。

専門の人がまごついたということは、何か知っていたということだと考えると、後から起こることの伏線だと考えられる。

しんし二人の目線からであるため、逆にふたりが勝手に迷い込んでしまったということも考えられる。

それに、あんまり山がものすごいので、その白くまのような犬が、二ひきいっしょにめまいを起こして、しばらくうなだれて、それからあわをはいて死んでしまいました。

動物が人よりもただならぬ心配を敏感に感じ取った。

二匹が一緒にめまいを起こすという不思議な状況や、最後に犬が助けにきたことを考えると、犬が邪魔だと考えた山猫たちの仕業とも考えられる。

実にぼくは、二千四百円の損害だ。

命Ⅱ金の考え方がうかがえる。

ぼくは二千八百円の損害だ。

現代の金額に直すと、二百万から三百万で犬を飼うということになる。二人は金持ちである。

もう一人のしんしよりも高い金額であり、二人の間で張り合っている。

と、も一人が、くやしそうに、頭を曲げて言いました。

「くやしそうに」頭を曲げるといっているのはどういう状態なのか。おそらく、うなだれているということだろう。

初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じつと、も一人のしんしの、顔つきを見ながら言いました。

ただならない雰囲気をやつと感じ取った。あるいは、前に発言したしんしが、後に発言したしんしの犬のほうが高価だったことに腹をたてているという可能性も考えられる。

さあ、ぼくもちよつと寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろろと思う。

怖いと言わずに、帰りたい理由を必死に言い訳しているところから、意地っ張りな性格である。

なあと、もどりに、昨日の宿屋で、山鳥を十円も買って帰ればいい。

食料でもないのに、どうして買って帰るのか。とつて帰れなかったら格好悪いという世間体を気にしているのだろう。なあとというのは、たいしたことではないという思いを表しており、そこにはもう一人の同意が得られて、うれしくて、安心したしんしの気持ちが出ている。

風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

不思議な空間との境界を踏み越えたきっかけの一文。

木は「ゴトンゴトン」と普通は鳴らないので、何の音をあらわしているのだろうか。おどろおどろしい雰囲気を出すための擬態語なのかもしれない。

そのとき、ふと後ろを見ますと、りっぱな一軒の西洋造りのうちがありました。

二人の声に反応したように突然現れた。「後ろ」となっており、通ってきたはずのところに店があるということ、不思議さが増している。

君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。

明らかに奇妙な状況を勝手に前向きにとらえて、都合のいいように受け入れている。単純な性格である。

おや、こんなところにおかしいね。

少し疑っているところから、一人目のしんしよりは、考えている。

こいつはどつだ。

驚き、喜んでいる。



やっぱり世の中はうまくできてるねえ。

「やっぱり」ということから、何か食べられる機会があること、世の中悪いことばかりではないということを考えていた。

今日一日なんぎしたけれど、今度はこんないいこともある。

「なんぎ」とは、猟師とはぐれ、犬に死なれ、獲物を見つかることが出来ずに腹をすかせて苦勞していること。「こんないいこと」とは、山奥で腹が減ったときにタイミング良く、料理店がそばにあったこと。

このうちは料理店だけでも、ただでぐちそうするんだぜ。

どうもそうらしい。決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。

二人とも、「ご遠慮ありません」の表記から、ただで料理が食べられると思っている。思い込みが激しいしんしの性格を表している。

二人は戸をおして中へ入りました。

押し戸だということが分かる。

そこはすぐろうかになっていました。

土間がなく、レストランのように土足で入る。

そのガラス戸のうら側には、金文字でこうなっていました。

ここでの文字は金。色によって何を変えようとしているのか。裏側をきちんと見ているのは、硝子戸で透けて文字があることが見えていたからだろう。

【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】

山猫にとっては、鮮度があつて油が乗っているおいしそうな人を待っている。

君、ぼくらは大かんげいに当たっているのだ。

つまり二人は若いだけでなく、太っている。これらの記述で、紳士二人は食えることが好きで意地っ張りであり、疑うことを知らない性格だということが分かる。

ずんずんろうかを進んで行きますと、今度は水色のペンキぬりの戸がありました。

「ずんずん」とあるので、次の扉まで距離がある事や、紳士二人の勢いがある事が分かる。

どうも変なうちだ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。

これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。

このように一人が提起した疑問をもう一人が打ち消す形で料理店の戸をくぐっていく。

そして二人はその戸を開けようとしみますと、上に黄色な字でこう書いてありました。

水色の戸に黄色な文字。

【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

山猫にとっては、注文が多いというのは、お客に対しての注文である。

なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。

「こんな」と田舎を見下している。注文が多いというのを、紳士たちは客からの注文が多くて時間がかかるという意味で理解している。

見たまえ、東京の大きな料理店だつて大通りには少ないだろう。

「見たまえ」とは、考えてみたまえの意味。「東京」と言っているので、紳士二人は東京をよく知っている。

【注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。】

先の扉にも同じような文章が書かれていることから、紳士二人は店側に丁寧な印象を持っただろう。

そうだろう。

疑問を抱いていたにも関わらず、もう一人の紳士の発言に簡単に同意し、先に進むようとしている。ここに、二人の紳士の関係性がうかがえる。たがいに対抗心があり、臆病と思われたくないという思いが垣間見える。

早くどこか部屋に入りたいもんだな。そしてテーブルにすわりたいもんだな。

「部屋に入」とは、食事の席に着くことを意味するだろうが、あえて「テーブルにすわ」と付け加え、丁寧さを増している。

ところが、どうもうるさいことは、また戸が一つありました。

「うるさい」とは、面倒くさい、煩わしいという意味。紳士は扉がたくさんある事に対して、面倒くささを感じだしている。

そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長いえの付いたブラシが置いてあったのです。

「あつたのです」とすることで、意外な思いが分かる。ここでは紳士の驚きを表している。

【お客様がた、ここにかみをきちんとして、それからはき物のどろを落としてください。】

「お客様がた」としていることから、客が複数であることに気づいている。

ぼくもさつきげんかんで、山の中だと思つて見くびつたんだよ。

「も」とあるので、紳士が二人とも山猫軒を見くびっていたことが分かる。彼らが見栄を張っていたことが分かる。

そこで二人は、きれいにかみをけずつて、くつのどろを落としました。

「けずつて」とあるが、けずるというのは梳る（櫛で髪をすく）という意味。

そしたら、どうです。

「どうです」とは読者に向けた語りかけである。読者をひきつけ、

次に起こる事が常識から外れている驚くべきことであると予告している。

ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうつとかすんでなくなって、風がどうつと部屋の中に入ってきました。

「板」とはブラシが置いてあつた飾棚の事。「そいつ」とはブラシの事。「置くやいなや」「なくなって」と起こつた出来事を一文にまとめることで、短時間で起こつたこと、驚きとともに観察していたことが読み取れる。風が吹くということは前の部屋はすでに消えているのか。何度か登場する風は何かを消す、またはごまかすことを目的としているのかもしれない。不気味さも演出している。

二人はびっくりして、たがいに寄りそつて、戸をガタンと開けて、次の部屋へ入っていきました。

今までにない扉を開ける擬音語を「ガタン」と書きくわえることで、二人の動揺を表している。この扉をあけるかどうかが大きな分かれ目である。普通の人だったら、櫛が消えた時点で引き返すだろう。

早く何か温かいものでも食べて、元気をつけておかないと、もうとほうもないことになってしまうと、二人とも思つたのです。

「何か温かいもの」とあるので今は寒い。動揺しているため、台詞ではなく、地の文が二人の思いを述べている。「もうとほうもないこと」とは、二人とも具体的に理解してはいないが、先の出来事で焦っている様子が分かる。しかし、恐怖よりも食欲が優っている。

戸の内側に、また変なことが書いてありました。

「変なこと」とは、紳士の思いであると同時に語り手の思いでもある。読者が山猫軒への懷疑を深めることになる。

【鉄ぼうとたまをここへ置いてください。】

二人が鉄砲を持っていることが分かっている。

見ると、すぐ横に黒い台がありました。

「すぐ」とすることで、とても近くにあった。切迫感がある。

なるほど、鉄ぼうを持ってものを食うという法はない。

「法」とは作法のこと。なぜかここでもう一度落ち着きを取り戻している。

いや、よほどえらい人がしじゅう来ているんだ。

不思議な出来事が起こる前に考えていたことを、もう一度口にすることで、出来事をなかったことにしようとしているのだろうか。「たびたび」を「しじゅう」と言い改めることで、この考えを強調している。

二人は鉄ぼうを外し、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

この後鉄ぼうがなくなったかどうかはわからない。山猫軒にもともとあったもの以外は消せないのかもしれない。

また、黒い戸がありました。

文字の色はわからない。

【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

一度綺麗にさせた靴を脱がせる意味は何だろうか。

どうだ、とるか。

紳士の中で疑いが募り、初めて相手に相談をしている。

しかたない、とろう。確かによっぽどえらい人なんだ。おくに來ているのは。

単文を重ね、倒置させている。

二人はぼうしとオーバコートをかきかけ、くつをぬいでペタペタ歩いて戸の中に入りました。

「くつをぬいで」とあるが、このくつは先ほどどろを落としたものであり、せつかく綺麗にしたくつをここで脱がせている。

また、「コツコツ」ではなく、「ペタペタ」という音により、くつを脱いだ後の足音を表している。

ネクタイピン、カフスポタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。

紳士二人が身につけているものを細かに指定して外すように書いている。主人は二人の様子を見ていたのか。

金物類を外させたのは、食べることが出来ないからである。また、とがったものは、食べるときにのどに刺さってしまうからである。「ことに」「みんな」と書き、注意を再三促している。

戸のすぐ横には、黒ぬりのりっぱな金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。

「黒ぬりの高級車」というように、黒塗りという言葉からは高級感が伝わってくる。黒ぬりとりっぱは対応している。また、黒ぬりの金庫に金属を入れるという所から、無機質なイメージも浮かぶ。

「ちゃんと」とあるので、貴重品を入れられるように用意周到だった。

ははあ、何かの料理に電気を使うとみえるね。

「ははあ」とあるのは、何かに納得して感嘆の気持ちを漏らしたものである。客が電気の影響を受けるぐらいの距離で電気を使った調理をする、というのは一体どんな料理なのだろうか。

してみると、かんじようは帰りにここではらうのだろうか。

入店するとき、ただでごちそうする店だと言っているのに、かんじようを気にしている。

つぼの中のクリームを顔や手足にすつかりぬってください。

「すつかり」というのは一つ残らず、ということなので、顔や手足に、余すところなくクリームを塗るように指示が出ている。とはいえ、二人は服は着たままであるので、体の全てに塗るわけではない。

見ると確かにつぼの中のもののは牛乳のクリームでした。

「確かに」とは戸に書いてある通りに、ということであろう。保湿

用のクリームなどではなく、牛乳のクリームだった。

クリームをぬれというのはどういうんだ。

「どういうんだ」というのはどういうことだ、ということ。手足にクリームを塗ることに疑問を感じている。

どうもおくには、よほどえらい人が来ている。

「来ている」とあるので、おくにえらい人が来ているということを確認している。二人は、えらい人がひび切れしないようにという店側の配慮だと思っている。

こんなとこで、案外ぼくらは、貴族と近づきになるかもしれないよ。

「こんなとこ」というのはこんな山奥のうちで、ということである。「貴族」はよほどえらい人の例であり、この二人は狩猟をして遊ぶような人物ではあるが、貴族ほどえらい人ではないということが分かる。「貴族に近づきになる」という言葉からは貴族への尊敬の念が感じられ、身分が重視されていることも垣間見える。

それでもまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へぬるふりをしながら食べました。

「それでも」というのは、顔や手足に十分にぬり終わっても、ということ。「めいめい」というのはそれぞれ、という意味であり、「ぬるふりをしながら」とあるので、自分が空腹により意地汚く食べているということがもう一人にばれないように、それぞれこっそりと食べていた様子がうかがえる。

それから大急ぎで戸を開けますと、そのうら側には、「クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。」

「大急ぎ」とあるが、何故だろうか。お腹が減っていたから、クリームが気持ち悪かったから、つまみ食いがバレないようになどの理由が考えられる。「大急ぎ」で開けたのにもかかわらず、そのうら側まで丁寧に見ている。

「クリームをよくぬりましたか」とあるが、耳にぬったか否かなど、少しの差でしかないのにもかかわらず、二度に渡って注意をしている。主人はクリームが好物なのであろうか。先にも書いたが、塗ったのは露出している部分で、体の大半は塗っていない。耳への塗り忘れを指摘するということは、過去にもこの畏にかかって塗り忘れた人がいたとも考えられる。

ここの主人は実に用意しゅうどうだね。

しつこさを気にすることもなく、むしろ気づいて用意しておいてくれたことに対して感謝に近い感情まで感じている。

ところで、ぼくは早く何か食べたいんだが、どうも、こう、どこまでもろうかじゃしかたないね。

「しかたないね」と、様々な注文をつけられて延々とうるかを歩かされていることに何の違和感も覚えず、流している。また、食べられないことへの諦めも感じられる。

すぐ食べられます。

普通に読めば可能の意味であるが、深読みすれば受け身ともとれる。

早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。

「早く」と店側も二人を急かしている。主人が我慢できなくなってきたのか。この文はいつ書かれたのだろうか。自分が一つ先の部屋で様子を見て主人に報告しては文字を書いているのかもしれない。そうだとすると主人には、二人の紳士の様子がお見通しである。

下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。

前後でもここを店ではなく、「うち」と言っていることも併せて、あくまでも従業員ではなく召使という発想をしている。また、自然と「下女」という言葉が出てきたことから、彼らは下女がいることが自然な生活（裕福な生活）を送っているのだろう。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

「大きな字」とあるので、この文を強調している。

お気の毒でした。

上から目線で客をいたわる皮肉言葉を投げかけている。しかし、実際に「お気の毒」なのはこれからである。

もうこれだけです。

「これだけ」とあるので、これで最後ということが分かる。

どうか、体じゅうに、つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。

「体じゆうに」の前後を読点で区切って、この部分を強調している。「たくさん」と「よく」を重ねて使うことで、たくさんもみこむではなく、よくもみこむでもなく、もみこみ具合が増していると思われる。また、クリームの上から酢に塩という変な味覚を持っている主人であることもわかる。

なるほどりっぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今度という今度は、二人ともぎよつとして、おたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました。

「なるほど」というのは先ほどの「確かに」と一緒の意味であると考えられる。「瀬戸の塩つぼ」とあるが、げんかんも瀬戸のれんがで出来ていたことから、瀬戸物がお気に入りなのかもしれない。

「今度という今度は」とあるが、紳士目線と言うと、今までも多少は気にしていたが、今度はさすがに許容しきれなかったことを表している。作者及び読者目線で言うのと、やっと気づいたか、という思いを表している。「ぎよつとして」とは驚いてということである。

「クリームをたくさんぬった顔」と敢えて書くのは、作者のユーモアである。

どうもおかしいぜ。

ついに一人がおかしいということに気づく。

ぼくもおかしいと思う。

それに続いて、もう一人もおかしいということに気づく。

たくさんさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。

一人は「くんだよ」、とまるで知っていたという口調で話している。だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べやううちと、こういうことなんだ。

それに対抗するようにもう一人の紳士も、「だからさ」と自分も知っていたという口調で話し始め、「ぼくの考えるところでは」と付けることよって、あくまでも自分が思いついたんだ、ということを強調している。「こういうことなんだ」と説明を言い聞かせている。お互いに意地っ張りである。「うち」とあるのは、先ほど下女といったことからわかるように、あくまでもうちと思っている。また、読点が多いことで、紳士が焦っている様子も表現している。

これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。

自分が食べられるという事実気づき、恐ろしさで上手く話せなくなっている。

がたがたしながら、一人のしんしは後ろの戸をおそうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

「どうです」は読者に向けた語りかけである。読者をひきつける効果がある。

パニックになっけていて気付かなかったが、もしかしたら引いたら開いたのではないか。最初の戸をおして入っていることから、他の戸もおして来たと考えると、戻るならば引くのが普通ではないだろうか。

もちろん、どちらにも開く戸もあるし、ここでは山猫によって開かないようになっていたということも考えられる。

おくの方にはまだ一枚戸があつて、大きなかぎあなが二つ付き、銀色のホークとナイフの形が切り出してあつて、

「まだ」とあることで、これまでも多かつた戸がさらに加えてあるということが強調されている。しかし、今までにない大きなカギ穴があつたり、銀色のホークとナイフが切りだされていることから、「最後であること」「食べられてしまうこと」が確実になる。

さあさあ、おなかにお入りください。」

「おなか」とは、「(部屋の)中」と「お腹」が掛つており、食べられるという意味である。「さあさあ」というのは、せかしている気持ちの表れ。

おまけに、かぎあなからは、きよろきよろ二つの青い目玉がこつちをのぞいています。

何かが戸の奥にすることがわかる。そして、ただでさえ食べられるという恐怖があるのにもかかわらず、日本人の一般的な目玉(黒、茶色)からかけ離れた「青い目玉」が見えていることで、さらに恐怖が増している。

「うわあ。」がたがたがたがた。

「うわあ。」がたがたがたがた。

この二文は、二人の「しんし」がほとんど同時に言ったものと考えられる。「がたがたがたがた」は前にもあるように、怖くて震えているととらえるのが良いだろう。

二人は泣きだしました。

「しんし」という大人が泣いてしまうほどの恐怖。また、二人が金持ちの家の息子だとすると、甘やかされて育つたため、根性がなくすぐに泣いてしまったと読むこともできる。

すると、戸の中では、こそこそこんなことを言っています。

戸の奥にいる何かが、話をしている。独り言であれば「こそこそ」よりも「ぼそぼそ」や「ぶつぶつ」となる。戸の奥には何かが二人(二匹)以上いる。

親分の書きようがまずいんだ。

親分がおり、今までの注文は親分が書いているということが分かる。これらの注文はどれも、しんし二人の状況にびつたり注文であり、親分には二人の様子が見えていたのだろう。

どうせぼくらには、ほねも分けてくれやしないんだ。

骨さえも分けてもらえない、いわゆる「下っぱ」である。「ぼくら」とあることから、やはり二人以上であることがわかる。

けれども、もしここへあいつらが入ってこなかったら、それはぼくらの責任だぜ。

二人のしんしが入ってこなければ、親分から何らかの罰があることがうかがえる。

おい、お客さんがた、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。

仮にも「お客さん」に「おい」と荒い言葉づかいをしている。やはり普通ではない。「いらっしやい」を三回も繰り返していることから、焦りや必死さが分かる。

それともサラダはおきらいですか。

「サラダ」はサラダのこと。サラダにされる予定だった。

二人はあんまり心をいためたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになり、おたがいにその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

「くしゃくしゃの紙くずのような顔」とは、しわだらけということだろうか。「心をいためた」というのは、心配したという意味だが、ここでは食べられることを心配したということだろう。「声もなく」とあるので、怖すぎて声も出なかったのだろう。

中では、フツフツと笑って、またさげんでいます。

怖がっている様子を楽しんでいる。親分を恐れながらもいたずらを楽しんでいる雰囲気が出ている。

親方がもうナフキンをかけて、ナイフを持って、舌なめずりして、お客様がたを待っていられます。

しんしたちを食べる準備が万端であることがよくわかる。「舌なめずりして」という表現から、とてもおなかをすかせていて、今か今かと待っているということが分かる。

二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

恐ろしさが「泣いて」を繰り返すことで強調されている。

という声がして、あの白くまのような犬が二ひき、戸をつき破って部屋の中にとびこんできました。

白くまのような犬は生きていた。また、「あの」という指示語があることから、最初にしんしが連れていた犬と同じ犬である。後ろの部屋が消えていたのであれば、一枚だけ突き破ってきたことになり、全部残っていたならば、今までの扉のすべてを押し破ってきたということになる。

と高くほえて、いきなり次の戸にとびつきました。

戸の奥にいるものが犬たちには敵とみなされている。「いきなり」という表現は突然やってきた勢いそのままとびついた。「とびつく」と

いう表現から、犬の勢いの激しさがわかる。

戸はガタリと開き、犬どもはすいこまれるようにとんでいきました。

戸は勝手に開いていると考えられる。一度戸にぶつかっているのであれば、「すいこまれるように」というスムーズな表現はできないのではないか。

前の文と同様に犬の勢いの激しさがわかる。また、「すいこまれるようにとんでいきました」という記述から、扉の向こう側が暗闇であり、犬の着地地点が見えなかったということも分かる。

「ニャアオ、クワア、ゴロゴロ。」

鳴き声から戸の奥にいたのは、猫（山猫）だと分かる。

という声が出て、それからガサガサ鳴りました。

「ガサガサ」が何の音であるかは不明であるが、もし、これが葉っぱの上を逃げていく音だとするならば、すでに外であり、しんしたちが次に外に放り出されることの伏線と考えることもできる。

部屋はけむりのように消え、二人は寒さにふるふるさえて、草の中に立っていました。

震える理由が「怖さ」ではなく「寒さ」になっている。あえて「寒さ」に「ふるえて」としているのは、さっきまでの恐怖体験がまるでなかつたかのようにする効果をねらっているのだろうか。

見ると、上着やくつやさいふやネクタイピンは、あっちの枝にぶら下がったり、こっちの根元に散らばったりしています。

起きたことがまるでなかつたかのようになっている。上着などが散らばっていることから幻から現実に戻ってきたことが分かる。

風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。

初めにも全く同じ一文があり、この一文はヤマネコが作り出した幻想の世界の終りの合図だと考えられる。

犬はフーとうなつてもどつてきました。

犬はとても興奮している。何かを威嚇しているが、これは猫に対してであると考える。

二人はにわかになんか気がついて、「おうい、おうい、ここぞ、早く来い。」

「元気がついて」とあるが、「元気になる」というよりも、「呆然としている様子から、意識がはっきりする・はっとする」ととらえる方が良いと考える。

みのぼうしをかぶった専門のりょう師が、草をザワザワ分けてやってきました。

初めて出てきた「専門の鉄っぽううち」と同一人物でだろう。猟師

が二人を捜していたと考えると、最初の猟師がまごついてどつかにいつってしまったというよりも、しんし二人が猟師とはぐれてしまったと考えるほうが妥当ではないか。

しかし、さつきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元のとおりにはなおりませんでした。「紙くずのようになった二人の顔」は、恐怖がすさまじかったことを表わすと同時に、幻のようなできごとが本当にあったのだという唯一の消えないしるしとなっている。

三 考察

(一) 紳士二人の性格について

この作品には「二人のしんし」が登場するが、どちらがどの台詞を言っているのかは描かれていない。そこで紳士をAとBに分け、口癖、話し方などから性格を推測し、どちらが話しているのかを考えてみた。まずAとBの分け方であるが、それは二人の犬が死んでしまった場面から推測する。

「しばらくくうなって、それからあわをはいて死んでしまいました。

「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」

と、一人のしんしが、その犬のまぶたを、ちよっと返してみてもいいました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」

と、も一人が、くやしそうに頭を曲げて言いました。

初めのしんしは、少し顔色を悪くして、じっと、も一人のしんしの、顔つきを見ながら言いました。

「ぼくはもうもどろうと思う。」

「さあ、ぼくもちよほど寒くはなつたし、はらはすいてきたし、もどろうと思う。」

「実にぼくは…」と話している「初めのしんし」に対し、二人目のしんしは「ぼくは二千八百円の…」と対抗している。「初めのしんし」をAとしたときに、必然的に「ぼくはもうもどろうと思う」と顔色をうかがいつつ話すのがA、「さあ、ぼくもちよほど…」と意地を張りつつ同意するのがBとなってくる。

次に、二人の紳士の性格であるが、それは次の場面から特に推測できる。

RESTAURANT
西洋料理店
WILDCAT HOUSE
やまねこけん
山猫軒

という札が出ていました。

A「君、ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。」

B 「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができんだろう。」

A 「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

B 「入ろうじゃないか。ぼくはもう何か食べたくてたおれそうなんだ。」

二人はげんかんに立ちました。げんかんは白い瀬戸のれんがで組んで、実にりっぱなものです。

そしてガラスの開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

【どなたもどうかお入りください。決してごえんりよはありません。】

二人はそこで、ひどく喜んで言いました。

A 「こいつはどうだ。(中略) このうちは料理店だけれども、ただでこちそうするんだぜ。」

B 「どうもそうらしい。決してごえんりよはありませんというのはその意味だ。」

他の場面からもみてとれるように、初めに話し始めることが多いのは、「しんしA」であると考えられる。そして「しんしB」はそれに同意し、流されることが多い。

まず、Aの口癖は「君」である。ここから、Aの若干相手を見下したような性格がうかがえる。そして、目の前で起きていることに一切疑いの目を向けていない。それに加え、Aは戸に書かれている「ごえんりよはありません」という言葉に対し、「ただでこちそうしてもらえぬ」ととんでもない勘違いをしている。このことからAは早とちりしやすい、疑うことを知らない単純な性格であることがわかる。

逆にBは、看板を目の前にして、「おや、こんなところにおかしいね」

と少し疑っていることがわかる。しかし、結局Aに流されて同意しているためBの性格は、Aよりは少し疑うということ分かっているが、流されやすく、相手の意見に同意しやすい性格であることがわかる。もうひとつ、二人の性格がわかりやすい場面がある。

B 「この水は変にすくさい。どうしたんだろう。」

A 「まちがえたんだ。下女がかぜでもひいてまちがえて入れたんだ。」

二人は戸を開けて中に入りました。

戸のうら側には、大きな字でこう書いてありました。

【いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。(中略) つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。】

なるほどりっぱな青い瀬戸の塩つぼは置いてありましたが、今度という今度は、二人ともぎょっとして、おたがいにクリームをたくさんぬった顔を見合わせました。

A 「どうもおかしいぜ。」

B 「ぼくもおかしいと思う。」

A 「たくさんの注文というのは、向こうがこっちへ注文してるんだよ。」

B 「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を料理にして、食べてやるうちと、こういうことなんだ。…」

香水のにおいを疑うあたりがBらしい。そして、Aは「下女がかぜをひいて…」と突拍子もないことを言い出している。このことからも前述にもある通り、二人の性格は手に取るようにわかる。後半の台詞

も、Aがやつと疑い始めたのに対し、Bは前々から疑っていて、それに同意する形になっている。そして、Aの「向こうがこっちへ注文してるんだよ」の台詞にもわざわざ同じようなことを詳しく説明し、対抗しつつも結局同意している。

このように、注文の多い料理店に出てくる二人の紳士のうち、一人は単純で、疑うことを知らない人間であり、少し人を上からみる癖がある。口癖は「君」もしくは「〜だぜ。(〜ぜ)」である。もう一人の紳士は、疑うということはしてみるものの、結局は人に流されやすく、そのわりには意地を張りやすい、対抗心をもった人間であるということがわかる。

(二) 山猫からの注文の真意とそれに対する紳士たちの思いこみの差について

※「山猫軒 見取り図」参照

○山猫の考えと紳士の考えの違い

A【どなたもどうかお入りください。決してごえんりよはありません。】

山猫：「遠慮なくお入りください。」

紳士：「遠慮なくご注文ください。全て無料で提供します。」

B【ことに太ったおかたやわかいおかたは、大かんげいいたします。】

山猫：「太っていて若い奴の方が美味しい。」

紳士：「ちように自分で当てはまり、大歓迎されていると思い、喜ぶ。」

C【軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

山猫：「店から客への注文の多い料理店」

紳士：「客から店への注文の多い料理店」

D【注文は**ずいぶん多い**でしょうが、どうかいちいち承知してください。】

山猫：「念押し。」

紳士：「注文が多いということは客も多く、繁盛している。」

E【お客様がた、ここをかみをきちんとして、それから**はき物のどろを落としてください。**】

山猫：「どうせ食べるなら綺麗な方がよい。」

紳士：「えらい人が来るような作法の厳しいレストランだからきちんとしなければ。」

F【鉄ぼうとたまをここへ置いてください。】

山猫：「もし正体がばれた時に撃たれたら困る。」

紳士：「鉄砲を持って食べるというのも良くない。また、えらい人の前で鉄砲を持つというのも悪い。」

G【どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。】

山猫：「食べるときに余計な物は外して欲しい。」

紳士：「えらい人の前でぼうしや外とう、くつは失礼である。」

H【ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことごとがったものは、みんなここに置いてください。】

山猫…食べるときにのどに詰まってしまおうから外して欲しい。
 紳士…料理に電気を使うから、感電しないように。

I【つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。】
 山猫…美味しいクリームで味付け。

紳士…顔や手足のひび切れ予防。お店は手足が切れないように気を使
 ってください。

J【クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。】

山猫…より美味しく食べるため。
 紳士…危なく耳にひびを切らさないように細かいところまで気を使っ
 てくれた。

K【料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ
 食べられます。早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてく
 ださい。】

山猫…すぐに食べてやる。こう水（酢）で味を調べておくれ。
 紳士…すぐに食べることが出来る。こう水は中身を酢と間違えたのだ。

L【いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。も
 うこれだけです。どうか、体じゆうに、つぼの中の塩をたくさんよくも
 みこんでください。】

山猫…塩をもみ込んだら出来上がり。最後の注文も聞いてほしい。
 紳士…注文というのは、店から客への注文のことで、自分たちが食べ
 られるのだということに気づく。

M【いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこうにできました。さあ
 さあ、おなかにお入りください。】

山猫…もう隠すつもりもない。おなかへお腹。（※【つぼの中の塩】の
 「なか」は漢字）

紳士…騙された（勘違いをした）ことに気付き、恐怖に震える。

○違いが生じた要因

・紳士二人のお腹が空いていたこと。

そもそも、こんな山奥にある（怪しい）お店に足を踏み入れた
 のは、お腹が空いていたからであった。早く何かを食べたいとい
 う思いに急かされた結果、食べ物にあり付けるように、自分たち
 に都合の良い解釈を繰り返した。その結果、勘違いが生じた。

・店側の注文が曖昧であったこと。

店側は、【当軒は注文の多い料理店ですから】「注文はざいぶん
 多いでしょうから」などの文において、大切な部分を省略してい
 る。右の文で言うと、大切なのは（店からの）という部分である。
 他の注文においても、なぜ髪をきちんとするのか、鉄砲を置くの
 か、クリームを塗るのかなどの説明が全くないため、紳士たちは
 勝手な解釈に走ってしまう。その結果、普通では考えられないよ
 うな考えにたどり着いてしまった。

・不思議に思ったことを気にしなかったこと。

一人の紳士（Bの紳士）は、「おかしいね」「どうしたんだろう」
 など、注文に対して何度か違和感を持っている。しかし、それを
 特に気にすることもなく、もう一人の紳士（Aの紳士）が説明を

加えてBを納得させている。そうして違和感を取り除いて進んだことにより、二人は勘違いに勘違いを重ねて最後まで来てしまったのである。



